

フィリピ書の修辞学的分析

— 演示弁論の視点から見た文学的問題 (1) —

山 田 耕 太

1. はじめに

本稿では、フィリピ書の文学的統一性、文学的構造、文学ジャンルという文学的諸問題を修辞学的批評の立場、とりわけ演示弁論の視点から論じてみたい⁽¹⁾。その前に、フィリピ書の文学的統一性を問題にした従来の分割説について要約し、それに対して従来の統一説について要点を簡潔にまとめておきたい。

(1) 文学的統一性の問題と分割説

フィリピ書は、複数の手紙が結び合わされたものではないか、という見解が最近までかなり支配的であった。それは3章と4章10-20節という二個所の問題と深く関わる。

第一に、3章の直前の2章19-30節には、しばしば手紙の終わりに書かれる旅行計画が書かれていること、3章1節は「終わりに」(loipon) という言葉で始まること、さらに2章30節までのテーマを要約した「主にあって喜びなさい」(3:1) というテーマとは異なり、かなり厳しい調子で3章2節以下の「犬どもに気をつけなさい。悪い働き手に気をつけなさい。あの切斷(割礼)に気をつけなさい。」という論敵に対する警告が続くこと、この個所には獄中で書かれた表現が見られないことなどから、3章1節前半、1節後半、あるいは2節から3章21節、4章1節、3節(それに8-9節を加える場合もある)、あるいは9節までの部分は、「論争の書」の断片という後からの挿入ではないかと考えられてきた⁽²⁾。

第二に、4章10-20節で贈り物の感謝が述べられるが、それを届けたエパウロデイトが瀕死の重病から奇跡的に治って送り返す際に(2:25-30)述べる言葉としては、余りにも時間的に遅いので、「感謝の書」の断片が後に挿入されたのではないかと想定された。

第三に、これらの内的な要因に加えて、ポリュカルポスのフィリピ書(3:2)にパウロが複数の手紙をフィリピに書いたことが暗示されていることを外的な証拠として挙げる。

分割説は、以上の二箇所を挿入個所と考える三分割説と「論争の書」のみを挿入個所と考える二分割説に分れる。すなわち、三分割説によれば「感謝の書(手紙A)」「獄中の書(手紙B)」「論争の書(手紙C)⁽³⁾」という断片的な手紙に分け、二分割説によれば「感謝の書」を含めた「獄中の書(手紙A)」「論争の書(手紙B)⁽⁴⁾」という断片的な手紙に分けた。

(2) 文学的テーマによる統一説の擁護

以上のような分割説に対して、3章の論敵の問題は「獄中の書」(1:28-29)で既に前提にされていること⁽⁵⁾、2章6-11節のキリスト賛歌と3章4-11節のパウロ自身の経験が密接な関係があるばかりでなく、それは「わたしに倣う者となりなさい」(3:17, cf.4:9)と勧める言葉と密接に関連し、論敵に対して「へりくだること」(2:8, 3:21, 4:12)を教えた一貫したテーマになっていること⁽⁶⁾、さらに「感謝の祈り」(1:3-11)の中に「感謝の書」(4:10-20)の内容が前もって言及されていること⁽⁷⁾、「キリスト賛歌」(2:6-11)のキリスト論は「キリスト者の在り方」(3:20-21)に同じような用語で展開されており、2-3章のテーマが一貫していること⁽⁸⁾などが指摘されてきた。

さらに、D. E. ガーランドは、3章1節の "loipon" は「終わりに」という意味ばかりでなく、「その上さらに」という意味もあり、必ずしも手紙の末尾に用いられるのではないこと、手紙の中での調子の変化はパウロの手紙で他にも見られることであり、調子の変化によって別の断片とは判断できないこと、パウロが早い時点で感謝を直接的に表明しなかったのは、直ちに返事できる状況にもなく、「ものほしさ」から表明しなくなかったこと(4:17)、ポリュカルボスがフィリピ書を書いた時点では、パウロのフィリピ書は既に一つの書であったはずで、複数形は「同じことをあなたに書く」(3:1)などに由来する別の理由によること、重要なテーマである「(市民として)生活すること」(1:27, 3:20, 4:1, 3)、「しっかりと立つ」(1:27, 4:1)こと、「共に戦う」(1:27, 4:3)ことなどが、フィリピ書を貫いて見られ、1章27節から4章3節までの議論が一貫して展開されていることを明らかにして統一説を擁護し、同時に3章は議論の「逸脱」であり、「演示弁論」であることを示唆した⁽⁹⁾。

2. 最近の議論の展開⁽¹⁰⁾

以上のような古い資料説を背景にした分割説と、それに対するテーマやモチーフの統一性や議論の一貫性による批判に基づく統一説に対して、書簡理論や修辞学の立場からフィリピ書全体の構造を問い質す分析が進められている。とりわけ後者では、従来とは異なる全く新しい視点で統一説が展開さ

れている。

(1) 書簡理論的分析の展開

L. アレグザンダーは、フィリピ書は家族に近況を伝える「家族の手紙」に分類されると考え、それに「遠くから離れた説教」(3:1-4:9)と「感謝の書」(4:10-20)が後から挿入されたと想定した⁽¹¹⁾。しかしながら、フィリピ書を「家族の手紙」とするアレグザンダーの分類は十分とは言えず、多くの研究者はフィリピ書を「友情の手紙⁽¹²⁾」に分類し、あるいは「感謝と勧告の書」に分類した⁽¹³⁾。

だが最近では、P. A.ホロウェイは、フィリピ書をパウロが投獄されたことを知って落胆し、苦しみを経験しているフィリピ人に対する「慰めの書」として分類し、その構成を手紙の前書き(1:1-2)と後書き(4:21-23)を除いて、序論の「感謝と執成しの祈り」(1:3-11)、本論の「識別すること」(1:12-4:9)として、「A:福音の『前進』と福音宣教者の『救い』において喜ぶこと」(1:12-2:30; 勧告2:1-4, 12-18, 範例2:5-11, 慰めと範例2:19-24, 25-30)、「B:キリスト者の生活と主を喜ぶこと」(3:1-4:1, 勧告3:1, 17-21, 17-21, 警告3:2-3, 範例3:4-11, 12-16, 結論4:1)、「C:結論の勧告」(4:2-9)、ならびに「後書きの感謝のノート」(4:10-20)に区分して統一説を擁護し、それぞれの段落での釈義に基づいて「慰め」という神学的テーマを展開する⁽¹⁴⁾。

(2) 修辞学的分析の展開

G.ケネディは、修辞学的視点で初めに「概ね演示弁論である」とフィリピ書について言及した⁽¹⁵⁾。これに対して、フィリピ書の修辞学的分析で決定的な影響力を与えたのは、その弟子のD. F. ワトソンである。

ワトソンによれば、フィリピ書は論敵の影響下にある人々に対して一致を勧めるという「修辞学的状況」の下で書かれ、彼らの将来の事柄に関わる助言であるので「演示弁論」ではなく、「議会弁論(助言的弁論)」であるとし、その構造を以下のように分析した⁽¹⁶⁾。

- ①手紙の始め(1:1-2)
- ②序論(Exordium, 1:3-26)
- ③陳述ないしは命題(Narratio or Propositio, 1:27-30)
- ④論証(Probatio, 2:1-3:21)
 - 第一の展開(2:1-11)
 - 第二の展開(2:12-18)
 - 「逸脱」(2:19-30)

第三の展開 (3:1-21)

⑤結論 (Peroratio, 4:1-20)

要約の繰り返し (Repetitio, 4:1-9)

感情への訴え (Adfectus, 4:10-20)

⑥手紙の結び (4:21-23)

こうして、ワトソンは1章27-30節がフィリピ書全体の議論の鍵である「陳述」ないしは「命題」であると見做し、3章の論争的な議論を「逸脱」の直後の「論証」の本論に位置づけ、4章10-20節を結論の中で感情に訴える部分に位置づけた。

ワトソンの分析の枠組は多少の修正を伴って多くの修辞学的批評家に受け入れられた。A. H. スナイマンは、「結論」には「要約の繰り返し」と「感情への訴え」の役割があることは認めるが、両者は不可分であり、ワトソンのようにそれらを二つの部分に分けること (4:1-9, 10-20) には反対した⁽¹⁷⁾。J. W. マーシャルは話し手や聞き手の「人柄 (エートス)」と「議会弁論」との関連で、ワトソンの枠組を前提にした上で、フィリピ書が「議会弁論」の性格をもつことを補強した⁽¹⁸⁾。B. ウィザリントン、ワトソンの議論の大枠を受け入れた上で、「論証」の部分を修正し (2:1-18, 19-3:1a, 3:1b-4:1, 4:2-3)、「テモテとエバフロディトの範例」(2:19-30)と「一致の訴え」(4:2-3)を一致を求める「陳述」(1:27-30)の具体的な展開と位置づけた⁽¹⁹⁾。D. A. ブラックは、書簡をマクロの構造で分析する「ディスコース分析」を行なうが、同時に修辞学的分析の視点でワトソンの枠組を多少修正して、フィリピ書の構造を「序論」(Exordium, 1:3-11)、「陳述」(Narratio, 1:12-26)、「議論」(Argumentatio, 1:27-3:21; 「命題」Propositio, 1:27-30、「論証」Probatio, 2:1-30、「反駁」Refutatio, 3:1-21)、「結論」(Peroratio, 4:1-9)、「陳述」(Narratio, 4:10-20)とした⁽²⁰⁾。

これに対して、C. バセヴィとJ. チャパは、ワトソンらの「議会弁論」説を批判し、ケネディのフィリピ書は「概ね演示弁論である」という視点を再び取り上げて、「キリスト賛歌」(2:6-11)が、キリストを称賛する「演示弁論」の要素があることを指摘した⁽²¹⁾。R. ブルッカーは、基本的にはワトソンの構造分析に基づいているが、「キリスト賛歌」のみならず、フィリピ書の「命題」(1:27-30)が主要な議論 (2:1-11, 12-18, 3:1-21)で展開され、フィリピ書全体が「演示弁論」的な言明であることを指摘した⁽²²⁾。

最近では、修辞学的分析を前提にしてフィリピ書の構造を把握した上で、フィリピ書の神学的テーマを展開する傾向が見られる。例えば、L. G. ブルームクイストは、フィリピ書における「苦しみ」の機能を展開する際に、書

簡理論の分析に基づいた上で、修辞学的分析を行なった。すなわち、手紙の前書き(1:1-2)と後書き(4:21-23)を除く手紙の本体は、「序論」(Exordium, 1:3-11)、「陳述」(Narratio, 1:12-14)、「列挙」(Partitio, 1:15-18a)、「議論」(Argumentatio, 1:18b-4:7; 「確証」Confirmatio, 1:18b-26)、「勸告」Exortatio, 1:27-2:18、「範例」Exempla, 2:19-30、「帰結」Reprehensio, 3:1-16、「勸告」Exortatio, 3:17-4:7)、「結論」(Peroratio, 4:8-20)に区分され、それぞれの段落での「苦しみ」の機能を積義して、その展開を跡づけた⁽²³⁾。それに対してT. C. ジェオフリンは、フィリピ書全体の命題である1章27-30節の分析で、「しっかりと立つ」という表現に政治的・軍事的背景を見出し、それとの関連でキリストと「苦しみ」を共にするという神学的モチーフを分析し、ワトソンの修辞学的分析に基づいてフィリピ書全体を理解する⁽²⁴⁾。D. K. ウィリアムズは、フィリピ書の「苦しみ」の機能をさらに深めて「十字架の神学」の神学を展開する際に、概ねワトソンの修辞学的分析に基づいて、それぞれの段落で「十字架の神学」の積義を行って議論を展開する⁽²⁵⁾。

さて、以上で書簡理論的分析や修辞学的分析による最近の議論の展開を簡潔に跡づけたが、フィリピ書は統一的な議論を一貫して展開しているのだろうか、また書簡全体はどのような構造なのだろうか、さらにフィリピ書はどのようなジャンルの手紙に分類されるのであろうか。以下では、このような問いに対して「演示弁論」の視点で解明を試みるが、演示弁論について簡潔に要点を述べておきたい。

3. 演示弁論の視点から

アリストテレスは弁論を過去の出来事について法廷で裁判官や陪審員に向けて告訴し弁護する「法廷弁論」、将来の政策や助言について議会で特定の聴衆に向けて勸告し阻止する「議会弁論」、現在の神・人物・都市・自然などを祭などの特別な機会に不特定多数の聴衆に向けて称賛し非難する「演示弁論」の三種類に分けた。それ以降、ギリシア・ローマ時代の修辞学での弁論の区分は、基本的にはアリストテレスの三区分に従う⁽²⁶⁾。

(1) 演示弁論の例とその下位ジャンル

「演示弁論」の代表的な一例として、ゴルギアスの「ヘレネー頌」、イソクラテスのキプロス王を称賛した「エヴァゴラス」(basilikos logos)や「祭典演説」(panegyrikos)、ツキディデス『戦史』第2巻に収められたペリクレスの「葬礼演説」(epitaphios)、エロースの神を称えた「賛歌」

(hymnoi) であるプラトンの『饗宴』などが挙げられる。この他、「演示弁論」に分類される演説としては、「到着演説」(epibaterios)、「別離演説」(syntaktikos)、「婚礼演説」(epithalamios)、「誕生日演説」(genethliakos logos)、「慰めの演説」(paramythetikos logos)、「招待演説」(kletikos) などがある⁽²⁷⁾。

(2) 演示弁論のハンドブック

「演示弁論」についてのハンドブックとして現存しているのは、アリストテレス『弁論術』(1.3, 1358bff; 1.9, 1366a23-1368a37)、アナクシメネスの『アレクサンドロス宛修辞学』(3, 1425b36-1426b22; 35, 1440b5-1441b29)、『ヘレンニウス宛修辞学』(1.2.1; 3.6.10-3.8.15)、キケロの修辞学的三部作『発想論』(1.7)、『弁論家』(2.84.340-2.86.350)、『弁論家の分析』(70-82)、クインティリアーヌス『弁論家の教育』(3.7)、テオン、ヘルモゲネース、アフソニウス、ニコラウスの『プロギュムナスマタ』の中の「称賛と非難」(epainos kai psogos)の項目⁽²⁸⁾、そして最も詳細なのは、紀元3-4世紀頃に書かれた雄弁家メナンドロスの『演示弁論の区別』『演示弁論について』であり、それに続いて紀元4世紀頃に書かれた偽ハリカルナッソスのディオニュシオスの『演示弁論について』である⁽²⁹⁾。

(3) 演示弁論と書簡理論

書簡理論で分類された書簡の中で、「演示弁論」の影響を受け、それに密接に関連する書簡類型には、称賛に関しては「称賛の書」(epainetike)、「推薦の書」(systatike)、「慰めの書」(paramytike)、「感謝の書」(apeucharistike)、「祝辞の書」(sygcharistike)、「非難に関しては「非難の書」(memptike)、「攻撃の書」(oneidistike)、「批判の書」(epitimetike)などがある⁽³⁰⁾。「勸告の書」(parainetike)は、「議会弁論」の影響下にあると考えるが、実は次に述べるように⁽³¹⁾、「議会弁論」ばかりでなく「演示弁論」の影響下にもある。

(4) 演示弁論と議会弁論

「演示弁論」は、その起源は詩に近い散文であるが、他の弁論との比較では「法廷弁論」よりも「議会弁論」に近い⁽³²⁾。「演示弁論」の中でも、「称賛」の中に「助言」が混在し、「助言」の中に「称賛」の要素を含む「勸告の演説」(protreptikos logos; exortatio)⁽³³⁾は、「演示弁論」と「議会弁論」の両方の性格を併せ持つ⁽³⁴⁾。初期キリスト教の説教や聖人伝にはこのジャ

ンルに属すものがしばしば見られる⁽³⁵⁾。具体的な「勧告の演説」の手引の例として、偽ハリカルナツソスのディオニュシオスの「競技者への勧告」⁽³⁶⁾が残されている。

(続く)⁽³⁷⁾

註

- (1) 本稿は、2003年9月15-16日に南山大学で開催された日本新約学会で拙稿「ガラテア書の修辞学的分析：プロギュムナスマタの視点から見て」（「同（1）」『敬和学園大学研究紀要』第13号、2004年、「同（2）」『新約学研究』第32号、2004年、所収）を発表した際に、同志社大学の橋本滋男教授から受けたガラテア書以外の修辞学的分析の可能性に関する質問に対して、具体的な例としてフィリピ書では統一的に説明できると答えたことを展開したものである。
- (2) フィリピ書が複数の手紙で構成されるという断片説の始めは17世紀まで溯る。Cf. S. Le Moyne, *Varia Sacra* II, 1685, 332-333 (A, 1:1-3:1; B, 3:2-4:23); cf. H. J. Holtzmann, *Lehrbuch der historisch-kritischen Einleitung in das Neue Testament*, Freiburg: Mohr, 1885, 285. また、3章が議論の「逸脱」(digressio) であるという説は、19世紀まで溯る。Cf. J. B. Lightfoot, *St. Paul's Epistle to the Philippians*, London: Macmillan, 1869 (2nd ed.), 69 (a parenthesis).
- (3) E.g., W. Schmithals, "Die Irrlehrer des Philipperbriefes," *ZTK* 54 (1957), 297-341, = *Paulus und die Gnostiker*, Hamburg-Bergstedt: Herbert Reich, 1965, 47-87(A, 4:10-23; B, 1:1-3:1, 4:4-7; C, 3:2-4:3, 8-9); B. D. Rahtjen, "The Three Letters of Paul to the Philippians," *NTS* 6 (1959-60), 167-173 (A, 4:10-20; B, 1:1-2:30, 4:21-23; C, 3:1-4:9); F. W. Beare, *A Commentary on the Epistle to the Philippians*, London: Black, 1959 (A, 3:2-4:1; B, 4:10-20; C, 1:1-3:1, 4:2-9, 21-23); G. Bornkamm, "Der Philipperbrief als paulinische Briefsammlung," *Neotestamentica et Patristica: Essays presented to O. Cullmann*, Leiden: Brill, 1962, 192-202 (A, 4:10-20; B, 1:1-3:1, 4:4-7, 21-23; C, 3:2-4:3, 8-9); H. Koester, "The Purpose of the Polemic of A Pauline Fragment," *NTS* 8 (1961-62), 317-332 (A, 4:10-20; B, 1:1-2:30 or 3:1; C, 3:1 or 3:2-4:1 or 4:9); W. Marxsen, *Introduction to the New Testament*, Oxford: Blackwell, 1968 (Gütersloh: Mohn, 1964), 61-62 (A, 4:10-20; B, 1:1-3:1, 4:4-7, 21-23; C, 3:2-4:3, 8-9), 山内眞『ピリピ人への手紙』日本基督教団出版局、1987年 (A, 4:10-20; B, 1:1-3:1a, 4:2-7, 21-23; C, 3:1b-4:1, 4:8-9)、青野太潮「フィリピ人への手紙」『パウロ書簡』岩波書店、1996年 (A, 1:1-3:1; B, 3:2-4:1; C, 4:2-23)。
- (4) E.g., G. Friedrich, *Der Brief an die Philipper*, Göttingen: Vandenhoeck und Ruprecht, 1981, 126-128 (A, 1:1-3:1a, 4:10-23; B, 3:1b-4:9); J. Gnilka, *Der Philipperbrief*, Freiburg: Herder, 1987 (4.Aufl.), 5-11 (A, 1:1-3:1a, 4:2-7, 10-23; B, 3:1b-4:1, 8-9)。
- (5) B. S. Mackay, "Further Thoughts on Philippians," *NTS* 7 (1960-61), 161-170, esp. 163.
- (6) T. E. Pollard, "The Integrity of Philippians," *NTS* 13 (1966-67), 57-66.

- (7) R. Jewett, "The Epistolary Thanksgiving and the Integrity of Philippians," *NovT* 12 (1970), 40-53, esp. 53.
- (8) W. J. Dalton, "The Integrity of Philippians," *Bib* 60 (1979), 97-102.
- (9) D. E. Garland, "The Composition and Unity of Philippians," *NovT* 22 (1985), 141-173.
- (10) 以下の最近の議論は、最近の新約聖書緒論でも具体的には若干の註を除いて言及されていない。Cf. R. E. Brown, *An Introduction to the New Testament*, New York: Doubleday, 1997, 496-498; U. Schnell, *Einleitung in das Neue Testament*, Göttingen: Vandenhoeck und Ruprecht (4. Aufl.), 2002, 158-160.
- (11) L. Alexander, "Hellenistic Letter-Forms and the Structure of Philippians," *JSNT* 37 (1989), 87-101は、以下のように構造を分析した。すなわち、①宛名と挨拶 (1:1-2)、②受取人のための祈り (1:3-11)、③差出人についての再確認 (1:12-26)、④受取人についての再確認の要望 (1:27-2:18)、⑤介在人の移動についての情報 (2:19-30)、⑥遠くから離れた説教 (3:1-4:9)、⑦感謝の書 (4:10-20)、⑧第三者の挨拶の交換 (4:21-22)、⑨健康を願う手紙の結び (4:23)。その中でも、中心となるのは情報交換による③④「再確認」である。
- (12) S. K. Stowers, *Letter Writing in Greco-Roman Antiquity*, Philadelphia: Westminster Press, 1986, 60; J. T. Fitzgerald, "Epistle to the Philippians," *ABD* vol.5 (1992), 320.
- (13) D. E. Aune, *The New Testament in Its Literary Environment*, Philadelphia: Westminster Press, 1987, 210-211.
- (14) P. A. Holloway, *Consolation in Philippians: Philosophical Sources and Rhetorical Strategy*, Cambridge: Cambridge Univ. Press, 2001.
- (15) G. Kennedy, *New Testament Interpretation Through Rhetorical Criticism*, Chapel Hill: University of North Carolina Press, 1984, 77.
- (16) D. F. Watson, "A Rhetorical Analysis of Philippians and its Implications for the Unity Question," *NovT* 30 (1988), 57-88; cf. idem, "The Integration of Epistolary and Rhetorical Analysis of Philippians," S. E. Porter & T. H. Olbricht (eds.), *The Rhetorical Interpretation of Scripture: Essays from the 1996 Malibu Conference*, Sheffield: Sheffield Academic Press, 1996, 398-426.
- (17) A. H. Snyman, "Persuasion in Philippians 4.1-20," S. E. Porter & T. H. Olbricht (eds.), *Rhetoric and New Testament: Essays from the 1992 Heidelberg Conference*, Sheffield: JOST Press, 1993, 325-337.
- (18) J. W. Marshall, "Paul's Ethical Appeal in Philippians," Porter & Olbricht, *Rhetoric and the New Testament*, 357-374.
- (19) B. Witherington III, *Friendship and Finances in Philippi: The Letter of Paul to Philippians*, Valley Forge, PA: Trinity Press Internationals, 1994.
- (20) D. A. Black, "The Discourse Structure of Philippians: A Study in Textlinguistics," *NovT* 37 (1995), 16-49.
- (21) C. Basevi & J. Chapa, "Philippians 2:6-11: The Rhetorical Function of a Pauline 'Hymn'," Porter & Olbricht (eds.), *Rhetoric and the New Testament*, 338-356.

- (22) R. Brucker, 'Christushymnen' oder 'epideiktische Passagen' ?, Göttingen: Vandenhoeck und Ruprecht, 1997.
- (23) L. G. Bloomquist, *The Function of Suffering in Philippians*, Sheffield: JSOT Press, 1993.
- (24) T. C. Geoffrion, *The Rhetorical Purpose and the Political and Military Character of Philippians: A Call to Stand Firm*, Lewiston, N. Y. : The Edwin Mellen Press, 1993.
- (25) D. K. Williams, *Enemies of the Cross of Christ: The Terminology of the Cross and Conflict in Philippians*, Sheffield: Sheffield Academic Press, 2002.
- (26) Aristotle, *Rhet.*, 1.3.
- (27) Cf. D. A. Russell & N. G. Wilson, *Menander Rhetor: Edited with Translation and Commentary*, Oxford: Clarendon Press, 1981.
- (28) Theon, *Progymnasmata*, Spengel, 109-112; Hermogenes, *Progymnasmata*, Rabe, 14-18; Aphthonius, *Progymnasmata*, Spengel, 35-43, Rabe, 21-32; Nicholaus, *Progymnasmata*, Felten, 47-58.
- (29) 演説弁論全体に関しては以下を参照。T. C. Burgess, *Epideictic Literature*, New York: Garland Publishing, 1968 (Chicago: Chicago Univ. Press, 1902); Russell & Wilson, *Menander Rhetor* ; L. Pernot, *La Rhétorique de L'Éloge dans le Monde Gréco-Romain*, Paris: Institut d'Études Augustiniennes, 1993.
- (30) Quintilian, 3.4.3; Burgess, *Epideictic Literature*, 187.
- (31) Cf. n.33.
- (32) Quintilian, 3.4.14; Burgess, *Epideictic Literature*, 96.
- (33) 「勸告の演説」は "parainetikos logos" とも呼ばれ、「勸告の書」とも密接に関連する。
- (34) Burgess, *Epideictic Literature*, 112-113, 228-234; Pernot, *La Rhétorique*, 720.
- (35) Burgess, *Epideictic Literature*, 241-242.
- (36) Russell & Wilson, *Menander Rhetor*, 377-381.
- (37) 本稿に続く第二部（発表した原稿では、本稿の第1、2、3節に続く、第4、5節にあたる）のワトソンの修辞学的分析の批判を主眼として、新たにフィリピ書全体を演説弁論の視点で分析した本論の「フィリピ書の修辞学的分析」は、『新約学研』第33号（2005年）に所収。